➲ 低・中学年｜「書くことの学習」

「リクエストカード」を書いてみよう ～関わり方を学ぶ～

○ 書くことの「楽しさ」を大切に

文字が書けるようになったばかりの子どもたちは、それを誰かに見てもらいたくて、よく「手紙」を書きます。しかし、学年が上がるにつれて書くことが嫌いになる子どもが増えるのは、なぜでしょう。

書きたくないという子どもにわけを尋ねてみると、「書くのが大変だから」、「何を書けばよいか思いつかないから」など、口々にいろいろな理由を語ってくれますが、どうやら自分の書く字に自信がもてなかったり、書いても意味がない、つまらない、と感じたりしている子どもが多いようです。

そこで今回は、自分が手紙を書くこと（行為）が確かに意味（効果）があるということを実感しやすい、「リクエストカードを書こう」という単元を紹介します。

○「リクエスト」ができるかな？

休み時間や給食の時間など、できるだけ子どもたちの日常生活の中で、「先生に何かお願いしたいことはないか」を尋ねておきます。「次の体育ではドッジボールをやりたい」とか、「もっと宿題を減らしてほしい」など、何でもよいでしょう。その中から皆が望んでいそうなひとつを選び、授業の最初に板書します。

《例》「体育でドッジボールをやりたい」

「これは、○○さんが先生にお願いしたいことなのですが、これだけでは何か足りない感じがするね」

　お願いします、という言葉をつける。

　どうしてやりたいのか、理由があるといい。

　やりたいという気持ちをもっとアピールする。

「じゃあ、誰か先生にお願いしてみてください」

いくつかの意見が出てきたところで、実際にそれを実演してもらいましょう。

○ 相手に受け止めてもらうための工夫をしよう

「相手がすぐ目の前にいるとは限らないので、面と向かってお願いができないこともあります。そこで、『～してほしい』というお願いの手紙（リクエストカード）の書き方をみんなで考えてみましょう」

実際には、次のような手順で話し合っていきます。

①誰に「お願い」ができるだろう？

新聞委員会のお兄さん・お姉さん、給食を作ってくださる皆さんなど、まずお願いする相手を挙げます。

②どんな「お願い」をしたらよいだろう？

次に、お願いする内容を付け加えます。読み聞かせをしてくださる方（司書、図書委員など）に、読んでほしい本や図書館に入れてほしい本をお願いする、などと具体化していきましょう。

③読む人が気持ちよく受け取ることができるようにするには、どのように書いたらよいだろう？

最後に、書き方についてじっくりと考えさせます。

・初めの言葉の中に感謝の言葉を入れる。

「いつも美味しい給食をありがとうございます」など

・なぜそのお願いをするのかの説明があるとよい。

「私は～が好きなので」、「いつも～をしているので」、「～ができるようになりたいので」など

※「ただ『好きだから』だけでは、説得力がないかもしれないね」などと投げかけてもよいでしょう。

○ 書くことの日常化を図り、論理的思考力を耕す

十分に話し合いを行った後で、宛先別の大袋を用意し、実際にリクエストカードを書くようにします。

初めはシンプルな手紙、次は挨拶をつけて、さらに後書きを加えてなどと、子どもの実態に応じて、徐々に項目を増やしていきましょう。

蛇足ながら、次の体育の時間の内容を、ドッジボールにすることができれば、効果は絶大です。

文｜村上博之（お茶の水女子大学附属小学校）